

私はイスラームという宗教を得ましたが
、イエス・キリスト（彼に平安あれ）や
、全能なる神のいかなる預言者への信仰
を失うことはありませんでした

「言ってやれ、（ムハンマドよ、）『啓典の
民よ、私たちとあなたがたの間に共通の言葉
へと来よう。それは、私たちはアッラーの他
には何者にも仕えず、何ものをもアッラーに
並べず……』」（クルアーン 第3章 アール
・イムラーン章 64節）

作成：

ムハンマド・アル＝サイイド・ムハンマド

**【出典：『なぜイスラームの預言者ムハンマド（彼に平安あれ）
を信じるのか？』より】**

[Why Believe in the Prophet of Islam, Muhammad (peace be upon him)?]
私たちが今取り上げている題名「私はイスラームという宗教を得ましたが、イエス・キリスト（彼に平安あれ）や、全能なる神のいかなる預言者への信仰を失うことはありませんでした」に基づいて、問いが生じます：

■ **なぜイスラームは「得ること」であり「勝利」なのか？そして、どのようにして私はイエス・キリスト（彼に平安あれ）や他の預言者への信仰を失わずにいられるのか？**

何よりもまず重要なのは、個人的な欲望や偏見から自由になり、理性的かつ論理的な思考によってこの問題に向き合うことです。これは、健全な知性が一致して認めることに従い、人間に神（アッラー）が授けてくださった「思考する」という恩恵を活かしてこそ可能となります。特に、それが神（創造主、崇高にして威厳あるお方）への信仰、そして人が主によって問われることになる「信仰の選択」に関わることであるならば、なおさらです。

このことは、善と悪を見分ける力を持ち、神の偉大さにふさわしい「正しい信仰」を選び取るという、人間に本来備わっている本性（フィトラ）に基づいて行動することを必要とします。イスラームの真実性と、その預言者ムハンマド（彼に平安あれ）の使命を裏付ける証拠や根拠に触れたとき、人は「イスラームを得た」ことを実感し、明確に見出すでしょう。そしてその人は、自身にその真実性を見分ける能力を与え、預言者の使命を理解する機会を授け、イスラームという宗教へと導いてくださった神に感謝を捧げるのです。

簡潔に述べれば、このような証拠や根拠のいくつかは以下の通りです：

第一に：

預言者ムハンマド（彼に平安あれ）は、若い頃からその民族の

間で優れた道徳的資質によって広く知られていました。これらの資質は、アッラー（神）が彼を預言者として選ばれたことにおける英知と正しさをはっきりと示しています。

その中でも最も際立っていたのが、**誠実さ（真実を語ること）と信頼性（人々からの信用）**です。

彼はこれらの特質により、「アミーン（誠実な者）」「サーディク（真実を語る者）」といったあだ名で呼ばれていました。そのような人物が、人々に嘘をつくことなど到底考えられません。ましてや、神に対して嘘をつき、自らを預言者・使徒と偽って名乗るなどということは、まったくもってあり得ないことです。

第二に：

彼（彼に平安あれ）の呼びかけ（ダアワ）は、純粋な本能（フイトラ）と健全な理性に完全に調和しています。具体的には次のような内容です：

- ☞ 神の存在、神性における唯一性、威厳、そして力の偉大さを信じるよう呼びかけていること。
- ☞ 人間、石、動物、木など、神以外の存在に祈りや崇拝を捧げないように呼びかけていること。
- ☞ 神以外の存在に恐れや希望を抱かないように導いていること。

人はこう考えるでしょう：

「私を創造し、これらすべての被造物を生み出したのは誰なのか？」

その論理的な答えは、「これらすべてを創造した存在は、確かに偉大な力と威厳を持つ神である」ということです。（何もないところから何かを生み出すことは、論理的に不可能だからである。）。なぜなら、「無から何かを生み出す能力」は、全能の神にしかありえないからです。

そして次に、「では、その神を創ったのは誰なのか？」という問いを抱いたとしましょう。もしその答えが「それもまた、力

と偉大さを備えた別の神だ」とすれば、その人はこの質問を無限に繰り返すことになり、同じ答えを無限に返すだけになります。

したがって、この問いに対する合理的な答えはこうです：

「創造と存在を無からもたらす絶対的な力を持つ『創造主なる神』には、それを創った創造主など存在しない。」

彼こそが唯一の神、独りでえられる存在であり、唯一崇拝に値するお方なのです。

さらに、眠り、排尿し、排便するような被造物の人間の中に神（アッラー）が宿るという考えは、神にふさわしいものではありません。

同様に、それは牛などの動物にも当てはまります。なぜなら、最終的にそれらすべての存在は死に至り、腐敗した死骸に変わっていくからです。

詳しくは『ヒンドゥー教徒とムスリムの静かな対話 “A Quiet Dialogue between a Hindu and a Muslim”』という書籍をご参照ください。

☞ また、神を像や他の形で描写することを控えるよう呼びかけている点も重要です。

というのも、神は人間が自らの欲望や想像力によって作り出すあらゆるイメージをはるかに超越した存在だからです。

詳しくは『仏教徒とムスリムの平和的な対話 “A Peaceful Dialogue Between a Buddhist and a Muslim”』という書籍をご参照ください。

☞ 神は唯一であり、誰からも生まれず、誰かを生む必要もないという点から、神が子孫を残す必要があるという考えを否定するよう呼びかけています。

神が子どもを持つ必要があるなら、なぜ2人、3人、あるいはそれ以上を持たないと言えるのでしょうか？

そうなれば、それらの子どもたちに神性を与えることにつなが

り、結果として祈りや崇拝が複数の神へと分散してしまうことになるのです。

☞ また、他の宗教的信仰において神に帰されている嫌悪すべき属性から神を清めるよう呼びかけています。以下はその例です：

- ユダヤ教およびキリスト教における神の描写では、人間を創造したことを後悔し、悲しんだとされています（創世記6章6節）。

（なお、キリスト教の聖書は、ユダヤ教の聖典を「旧約聖書」として含んでいます）。

しかし、後悔や悲しみという感情は、結果を知らずに間違った行動を取ったときに生じるものです。これは、神の全知性と矛盾します。

- また、ユダヤ教とキリスト教では、神が天と地を創造した後に休息し、力を取り戻したと描写されています（出エジプト記31章17節、英語訳にて確認可能）。

しかし、休息や力の回復は、疲労や労力が前提となるものであり、神の全能性と矛盾します。

📖 詳しくは『イスラーム、キリスト教、ユダヤ教の比較とそ
の中からの選択 “A Comparison Between Islam, Christianity,
Judaism, and The Choice Between Them”』という書籍をご参照く
ださい。

☞ 神に「人種差別」という属性を帰することを否定する呼びかけ。ユダヤ教が主張するように、神が特定の個人や民族のための神であるという考え方は間違っています。人間は、自らの創造主によって、本能的に人種差別を拒み、嫌悪するように作られています。したがって、この本能を授けた神ご自身に人種差別という性質を帰することは、全くふさわしくありません。

☞ 神の属性の偉大さ、完全さ、美しさを信じるよう呼びかけるものです。これによって、神の限りない力、完璧な知恵、すべてを包括する知識が強調されます。

㊦ 神の啓典、預言者、そして天使たちを信じるよう呼びかけるものです。ここでは、機械と人間の比較がなされます。

複雑な構造を持つ機械には、誤作動を防ぐために、創造者からの操作方法や使用目的を説明する「取扱説明書」が必要です（これは創造者の存在を前提とするものです）。

同様に、あらゆる機械よりも遥かに複雑な人間にも、人生の在り方を明確にし、神が定めた法則に基づいて生活を整理するための「導きの書」や「指針」が必要です。

この導きは、神が選ばれた預言者たちを通して与えられるものであり、神の啓示を律法や教えという形で伝えるために、神の啓示を届ける任を負った天使を通じて伝えられる。

㊦ 神の預言者および使徒たちの地位と尊厳を高め、他の宗教において彼らに帰されている、徳のある人物にはふさわしくない行為——ましてや預言者にふさわしくない行為——から彼らを潔白とするよう呼びかけています。たとえば：

- ユダヤ教とキリスト教における預言者アロンに対する非難。彼が子牛の形をした偶像を崇拝したのみならず、そのために神殿を建て、イスラエルの子孫にその偶像を崇拝するよう命じたとされています（出エジプト記32章）。

- 預言者ロトが酒を飲み、自分の娘2人を妊娠させ、彼女たちがその子を産んだとされる非難（創世記19章）。

全能のアッラーが、ご自身と被造物との間の使者として選ばれ、メッセージを伝えるために任命された者たちに対してそのような非難を向けることは、神の選択そのものを批判することに等しく、その結果として神が「隠されたことを知らず、知恵に欠けた存在」であるかのように描くこととなります。

というのも、預言者たちはすべての人々にとっての「導きの光」であるべき模範だからです。

ここで疑問が生じます：

もし、預言者たちでさえそのような非道徳的な行為から逃れられなかったのであれば、彼らの信者たちがそのような罪から守

られる保証があるのでしょうか？

むしろこれは、人々がそのような非道徳的な行為に陥り、それが広がる口実となってしまうかねません。

☞ 死後に復活し、審判が行われる「審判の日」を信じるよう呼びかけるものです。そこで、人々はその生涯の行いについて責任を問われます。

信仰と善行には、永遠の至福に満ちた人生という大いなる報酬が与えられ、不信仰と悪行には、惨めな人生という厳しい懲罰が下されるのです。

☞ 正しい立法、高潔な教え、そして過去の宗教における信仰の歪みを正す呼びかけ。

その一例としては：

- 女性について：

ユダヤ教およびキリスト教では、イブ（アダムの子、彼に平安あれ）がアダムの不従順の原因であり、主によって禁じられた木の実を食べよう誘惑したとされ（創世記 3:12）、その結果、神は彼女と彼女の子孫に妊娠と出産の苦しみという罰を与えたとしています（創世記 3:16）。

しかし、聖クルアーンは、アダムの不従順はサタンの誘惑によるものであり、妻イブのせいではなかったと明確に述べています（アアラーフ章 19-22節、およびター・ハー章 120-122節）。

このようにして、過去の宗教が女性に対して抱いていた軽蔑の根拠を取り除いたのです。

イスラームは、女性を人生のあらゆる段階で尊重すべきであると教えています。

預言者ムハンマド（彼に平安あれ）はこう言われました：「女性を優しく扱いなさい」（サヒーフ・ブハーリー）。また、こうも言われました：「娘を持ち、彼女を生き埋めにせず、侮辱せず、息子を彼女よりも優遇しなかった者は、その娘のおかげでアッラーにより楽園に入れられる」（アフマド伝）。

－ 戦争について：

ユダヤ教およびキリスト教では、子ども、女性、高齢者、男性を含むすべての人々を殺し破壊することを命じる戦争の話が多く記録されています（ヨシュア記 6:21 など）。

これは、現代における殺戮への渴望や大量虐殺（パレスチナで起こっているような）への無関心を説明する要因ともなっています。

一方、イスラームにおける戦争の寛容さは、裏切りの禁止や、子ども、女性、高齢者、非戦闘員の殺害を禁じている点に現れています。

預言者ムハンマド（彼に平安あれ）はこう言われました：「幼児、子ども、女性、高齢者を殺してはならない」（アル＝バイハキー伝）。

また、イスラームはムスリムと戦った捕虜に対しても親切に接することを求め、彼らに危害を加えることを禁じています。

詳しくは『イスラームと日本、過去と現在の諸問題におけるイスラームの解決方法』という書籍をご参照ください。

三番目：アッラーが預言者ムハンマド（彼に平安あれ）を通して実現させた奇跡や非凡な出来事は、アッラーが彼を支持していた証である。これらは以下のように分類される：

- ・ **有形の奇跡：**たとえば、ムハンマド（彼に平安あれ）の指から水が湧き出したこと。これは、何度かの機会において信者たちが渇きによって命を失うのを救う重要な役割を果たした。

- **無形（非物理的）の奇跡：**

- － 彼の祈りが応えられた例：たとえば雨を願って祈った時に雨が降ったこと。

- － 預言者ムハンマド（彼に平安あれ）は、見えない事柄について多くの予言をした：

たとえば、エジプト、コンスタンティノーブル（現イスタンブール）、エルサレムなどの将来の征服、そしてその支配領域の拡大についての預言である。

彼はまた、パレスチナのアシュケロンの征服と、それがガザに併合されること（歴史的には「ガザ・アシュケロン」として知られている）についても予言しており、それは以下のような彼の言葉に見られる：

「あなたがたのジハードの中で最も優れているのは、国境を守ることであり、その最たるものはアシュケロンでのそれである」【アル＝アルバーニーによる『シルシラ・サヒーハ』】。

このハディースにおいて暗示されているのは、この場所が将来、大きなジハードの舞台となり、アッラーの道において高潔な戦士たちが忍耐と防衛をもって立ち向かわなければならないことを意味している。

予言されたすべてのことは実際に現実となっている。

－ 予言者ムハンマド（彼に平安あれ）は、1400年以上も前に、数多くの科学的な未知の事実を予言しており、現代科学がその後、それらの真実性と正確さを発見している。その一例が、彼の次の言葉である：

「精液の一滴に四十二の夜が経過すると、アッラーはそのもとに天使を送り、天使はそれを形作り、その聴覚、視覚、皮膚、肉、骨を創造する…」【ムスリムによって伝承】。

－ 現代科学によれば、受精から43日目、すなわち第7週の初めから、胎児の骨格構造の形成が始まり、人間の形が現れ始めることが明らかになっており、これはまさに予言者の言葉を裏付けている。

● クルアーンの奇跡（審判の日まで残る最大の奇跡）：その独特な文体により、雄弁さで知られるアラブ人ですら、最も短い章と同じものすら作り出すことができなかった。

－ 聖クルアーンには、過去・現在・未来の多くの未知の事柄が記されており、その中には1400年以上前には誰も知り得なかった数多くの科学的事実も含まれています。後に現代科学がそれらの真実性と正確さを発見しました。これが、さまざまな科学

分野の多くの学者たちがイスラームへ改宗するきっかけの一つとなっています。

【コーランに記された天文学的事実に深い感銘を示した人々の中には、東京天文台の所長である吉英小斎教授がいます】。

その一例として、全能のアッラーが宇宙を広げ続けておられるというクルアーンという言葉が挙げられる：

「そしてわれは力をもって天（宇宙）を造り、それを広げているのはまさにわれである」【アッ＝ザーリヤート章：47節】。この事実が科学的に発見されたのは、ごく近代になってからである。聖クルアーンという言葉の精密さと、それが知識と熟考を促す呼びかけであることは、まさに驚くべきものである！

－ アッラーが啓示として最初にクルアーンの中から下された言葉は、次の節である：

「あなたの主の御名によって読め。主は創造なされた」【アラク章：1節】。

「読むこと」こそが知識と理解への道であり、そこから人類のあらゆる分野での進歩が始まるのである。

📖 詳細については、『イスラームと現代科学の発見 預言者ムハンマドの預言とその教え “Islam and the Discoveries of Modern Science as the evidence and proofs of the prophethood and messengership of Muhammad (peace be upon him)”』という書籍を参照のこと。

－ 論理的な考察：

上記で述べたことは、あらゆる知的レベルの人々が理解できる公正な基準であり、これによって預言者や使徒の真実性、そしてその使命やメッセージの正しさを認識することが可能になる。

もしユダヤ教徒やキリスト教徒に「なぜあなたは、奇跡を目撃していないのに、ある預言者の預言性を信じたのですか？」と尋ねたら、彼らの答えはこうであろう：「彼の奇跡を伝えた人々の継続的な証言があるからだ。」

この答えを論理的に辿れば、ムハンマド（彼に平安あれ）を信じることに繋がる。なぜなら、彼の奇跡を伝えた者たちの継続的な証言は、他のどの預言者よりもはるかに多く、確かなものだからである。

■ さらに、**アッラーによって保存された彼の伝記（スィーラ）**を通じて、その使命の真実性は明らかになる：

1. 彼が自ら説いたことを一貫して実践しようとする熱意。それは、礼拝の導き、高尚な教え、崇高な道徳を含み、このはかない世における敬虔さと禁欲さに現れている。

2. ムハンマド（彼に平安あれ）は、彼の呼びかけを放棄するよう、メッカの民から金銭、王位、名誉、最も高貴な女性との結婚などを提示された。しかし、彼はこれらを拒否し、アッラーの唯一性への呼びかけ、純粋な礼拝、偶像崇拜の放棄、善の推奨、悪の禁止をやめなかった。その結果、彼の民からの害、敵意、迫害、そして戦争にまで苦しんだ（彼に平安あれ）。

3. 彼の仲間や国民に対して、彼を過度に称賛しないよう繰り返し教えたこと。彼はこう言った：

「キリスト教徒がマリアの子を称賛したように、私を過度に称えてはならない。私はただのしもべである。ただ、『アッラーのしもべであり、アッラーの使徒である』と言いなさい」【サヒーフ・アル＝ブハーリー】

4. アッラーは、彼がその使命を完全に伝えるまで彼を守り続けられ、ついにはイスラーム国家を樹立させ、彼を満足させられた。

✓ これらすべてが、彼（彼に平安あれ）がアッラーから遣わされた真の使徒であることを示す証拠として十分ではないだろうか？

➤ 私たちは、「彼はパランの山から輝き出た」という句の後に続く「彼は一万の聖徒たちと共に来た」という申命記（33:2）の文が、アラビア語訳から省略されていることに注目します。この句は、太陽の昇りとその光が地平線に広がることになぞ

らえて、預言者ムハンマド（彼の上に平安あれ）の預言に似ています。創世記（21:21）には、「彼（イシュマエル）はパランの荒野に住んだ」とあり、イシュマエル（彼に平安あれ）がヒジャーズの地（現在のメッカ）に住んでいたことは、連続的な伝承によって知られています。したがって、パランの山々とはメッカのあるヒジャーズの山々を指します。これは、ムハンマド（彼に平安あれ）が流血なくメッカを征服し、その民を赦し、一万の仲間と共に来られたときのことを明確に示しています。この省略された部分「彼は一万の聖徒たちと共に来た」は、『欽定訳聖書（KJV）』、『アメリカ標準訳聖書（ASV）』、『拡大訳聖書（Amplified Bible）』などの英語版聖書には確認されています。

➤ また、詩篇（84:6）の巡礼者の賛美の中で、「バカ（Baca）」という語がアラビア語訳では置き換えられており、預言者ムハンマドの故郷である（メッカ）におけるカアバ神殿への巡礼を明示的に示さないようになっています。（メッカ）は「バカ（Baca）」とも呼ばれており、これはクルアーンのアール・イムラーン章（3章：96節）においても「バカ」として記載されています。この文は『欽定訳聖書（KJV）』などでも確認されており、[valley of Baka] という形で記載されています。

「Baka」の最初の文字が大文字になっていることは、これが固有名詞であり、これは、「固有名詞は翻訳されない」という事実を示している。

📖 出典：『ムハンマド（彼に平安あれ）は確かにアッラーの預言者である “Muhammad (Peace be upon him) Truly Is the Prophet of Allah”』という書籍をご参照ください。

■ イスラームの中庸性と普遍性：

イスラームは平和の宗教であり、すべての人々を受け入れ、彼らの権利を認め、アッラーのすべての預言者を信じるよう呼びかけています。

－特に信仰の問題において、イスラームはすべてにおいて中庸を保っており、キリスト教における最も重要な問題——すなわちキリスト（彼に平安あれ）の問題——に対して、以下のような立場を取っています：

- キリスト・イエス（彼に平安あれ）の預言者性、その奇跡的な誕生、そして揺りかごの中で語ったという奇跡を信じること。これは、彼の母に対してユダヤ教が不貞を働いたと非難したことから彼女の潔白を示すアッラーからのしるしであり、彼女を敬うものであり、後における彼の預言者性・使徒性の証でもあります。

✓ 理性的な観点から見ると：

これは、ユダヤ教のようにキリスト（彼に平安あれ）の使徒性を否定し、彼を中傷し、その誕生を不義によるものとし、母親を侮辱して不貞を働いたと非難するような過小評価でもなく、またキリスト教のように彼に神性を帰するという過剰な評価でもない、論理的で中庸な立場です。

■ 論理的観点からこれを明確にすること：

✓ 純粋な本性と健全な理性が、人間の本性と動物の本性の結合（たとえば、人間と牛などの動物の結婚）によって両者の性質を兼ね備えた存在（半分人間で半分牛など）が生まれるという主張を受け入れることはできないように、これは人間の尊厳を貶めるものであり、たとえ両者が被造物であったとしても容認できない。同様に、神性と人間性が結合して神人両性を持つ存在が誕生するという主張も、健全な理性と純粋な本性では到底受け入れられない。なぜなら、これは神を貶め、卑しめるものであり、神と人間の間には大きな違いがあるからである。特にその存在が女性の陰部から生まれ、さらには侮辱、唾を吐きかけられ、平手打ちをされ、裸にされ、さらには磔にされ殺され、埋葬されるという信仰は、偉大なる神にふさわしいものではない。

✓ キリスト（彼に平安あれ）が食事をし、排泄を必要としていたことはよく知られています。このようなことは、神にふさわしい性質ではなく、眠り、小便をし、排便し、腹の中に汚れた不浄物を抱えるような被造の人間の中に神が受肉するということは考えられません。

✓ 小さく限られた容器が海の水を収めることができないように、力のない被造物の胎内に偉大なる神が宿ると主張することは理にかなっていない。

✓ 自分の罪でない罪を他人が負うことが不合理であるように（たとえそれが父や母であっても）、聖書自体もこう述べている：「父は子のために死んではならず、子は父のために死んではならない。各々は自分の罪のために死ぬものとする」（申命記 24:16）。また「罪を犯した者が死ぬ。子は父の罪を負わず、父も子の罪を負わない。義人の義は彼自身に帰し、悪人の悪は彼自身に帰す」（エゼキエル書 18:20）。ゆえに、人類がアダムの不服従による罪を継承しているとする考え方（原罪）は、聖書の記述自体により否定され、贖罪の教義は論理的に受け入れがたいものである。

✓ アダムの不服従（単に禁断の木の實を食べた行為）に対する神からの赦しが、「十字架刑と殺害」を要求すると仮定するならば、なぜ罪を犯したアダム自身が磔にされ殺されず、むしろキリスト-彼は伝道者であり、正しい教師であり、敬虔で、献身的に母親に尽くした人物だった- がその身代わりにならなければならないのでしょうか？

それだけでなく、人間に宿ったとされる神自身が、磔にされ殺されなければならないという主張は、一体なぜ必要とされるのでしょうか？

✓ では、アダム以降の人類が犯した数々の重大な罪や過ちについてはどうなのか？ それらの罪を贖うためには、また別の人間の姿をとった神が殺される必要があるのか？ もしそうで

あるならば、人類には何千人もの「キリスト」が必要になるだろう。

✓ 神は悔い改めて後悔したアダムの罪を、他の罪と同じように赦すことができないのか？ 神にそれができないとでも言うのか？ いや、神は確かにそれができる全能の存在である。

✓ もしキリストの神性が父なしに生まれたことに基づいているのであれば、父も母もないアダムについてはどう説明するのか？

✓ もしキリストの神性が奇跡によるものであるならば、預言者ムハンマド（彼に平安あれ）やその他多くの預言者たちも多くの奇跡を行っている。では彼らも神とされるべきなのか？ もちろん違う。

■ キリスト教が神の贖い主であると主張するキリストの本質について、重要な論理的な説明があります。

キリストの本質が「死すべき存在」なのか「不死の存在」なのかによって、以下のことが明らかになります：

1. キリストの本質が死すべきものであるなら、彼は神ではありません。したがって、彼が神であり、かつ贖い主であるという主張は無効です。

2. キリストの本質が不死であり神であるなら、彼は死んでおらず、贖いは存在しなかったことになります。

➤ 神性と人間性の結合によって、両者の性質を兼ね備えた存在が人間の形で生まれたという信仰（キリストに関するもの）に対して、私たちが理性的に提示した無効性の説明は、他の社会において異なる時代に主張された事例にも当てはまります。たとえば、インドにおけるクリシュナ、東アジア社会におけるブッダ、古代エジプトにおけるホルスなどです。これらの神話はキリストの物語よりも古いものです。

✓ したがって、このような信仰は、啓示や理性に基づく確かな根拠を持たない、古代民族の宗教や伝説、神話から借用された観念にすぎないことが明らかになります。

■ **明確化**：キリスト教はイエス・キリスト（彼に平安あれ）の神性を主張していますが、彼自身はどの福音書の中でも、「私は神である」あるいは「私を礼拝せよ」といった明確な言葉でそう述べたことは一度もありません。また、彼の弟子たちにそのような教えを与えたこともありません。

➤ 反対に、『マタイによる福音書』21章11節には、次のように明記されています：「群衆は言った、『これはナザレのイエスという預言者だ』」

➤ 同様に、キリスト（彼に平安あれ）も弟子たちに祈りの仕方を教え、自ら祈り、ひれ伏して礼拝しました（マタイによる福音書26章39節）。彼は誰に対してひれ伏して祈ったのでしょうか？ それは彼の神に対してではなかったのですか？ これはまさに、イスラームにおける祈りの方法なのです。

➤ また、イエス・キリスト（彼に平安あれ）は弟子たちに「平和の挨拶」で挨拶し合うように教えました。『ヨハネによる福音書』20章21節と26節に記されている通りです。

この挨拶は、イスラームにおける挨拶と同じで、「あなたの上に平安がありますように」と言い、返答として「あなたにも平安がありますように」と返します。

➤ 多くの人々がイスラームを受け入れた後、こう言います：「私たちは今、以前よりも良きキリスト者です。なぜなら、キリストの教えに従っているからです。」

● **私たちは明確にします**：クルアーン（聖クルアーン）には「マルヤム章（スーラ・マルヤム）」という完全な章があり、イエス・キリストとその母マリア（彼らに平安あれ）に対して、聖書では見られないほどの敬意と称賛が込められています。－イスラームは、イエス・キリストとその母マリアの地位を高く掲げ、イエスをアッラーによって遣わされた高貴な預言者として信じることを呼びかけ、その教えに従うよう勧めています。なぜなら、彼の教えは、預言者ムハンマド（彼に平安あれ）がもたらしたイスラームの教えと調和しているからです。

🔊 詳細については、『キリスト教徒とムスリムの静かな対話
“A Quiet Dialogue Between a Christian and a Muslim.”』という書籍を参照のこと。

🔊 詳細については、『なぜイスラームを宗教として選ぶのか？
“Why choose Islam as a religion?”』という書籍を参照のこと。

■ **結論として**、このプレゼンテーションは客観的であり、アッラーが私たちに善悪を識別するために授けてくださった理性と明確な論理に一致し、また、純粋な魂が求める高貴な信仰にも調和しています。そのため、預言者ムハンマド（彼に平安あれ）の呼びかけとイスラームの真実性を証拠によって認識しながら、まだ信仰に至っていない人々に対して次の問いが生じます：

● イスラームについて誠実に考え、それが他の宗教では見つけることのできない、アッラー（神）に対する信仰に関して、あなたの疑問に対する答えを提供してくれるかどうかを真剣に検討することを妨げているものは何でしょうか？なぜなら、人はアッラーの御前で、自らの信仰と選択の中で真理を追求したかどうかについて責任を問われるのです。

● もしイスラームを選ぶことで、私のすべての問いに対して論理的で分かりやすい答えが得られ、ある特定の概念を無理やり押し付けられることもなく、そしてキリスト（彼に平安あれ）への信仰を失うこともないとすれば（それも自然の本性にかなっており、明確な理性と論理的思考に反しない正しい形で）、何の害があるのでしょうか？ しかも、イスラームにおいてキリスト（彼に平安あれ）とその母、聖母マリア（彼女に平安あれ）はともに高貴な地位にあるのです。そして私は他の預言者たちに対する信仰も失うことはありません。

アッラーが私たちすべてを善と真理へと導いてくださいますように。